ジュエリストへの道

アメリカはワシントン D.C. に位置するスミソニアン博物館は、21 を越える博物館などの施設と、1 億 5500 万点を越える所蔵品を擁する、世界有数の博物組織です。ありとあらゆる分野の遺物がそこにはあり、本書で紹介される美しい宝石達も、そこに含まれます。

この図鑑には大きく分けて二つの宝石が載っています。一つは最高に美しい宝石。もう一つは最高に美しく歴史ある宝石。前者には、高さ 35 センチのアクアマリン製のオベリスクに、世界一大きい水晶玉、後者には、マリー・アントワネットが着けていたイヤリング、ナポレオンが妻に贈ったネックレスなどがあります。膨大な量の素晴らしい宝石が、来歴と共に紹介されています。

これを読んでいると、不思議な気持ちになります。というのも、いくつかの宝石の来歴は何世紀も前に遡り、かつての持ち主の写真は古風な肖像画や白黒写真であったりするのに、横に並ぶ当の宝石の写真が、たったいま生まれたかのような無垢な輝きを放っているからです。こんな貴重な体験ができるのはスミソニアン博物館だけでしょう。

歴史に興味のある人、宝石に興味のある人におすすめしたい１冊です。（　　）

『スミソニアン宝石コレクション
世界の宝石文化史図鑑』
ジェフリー・エドワード・ポスト 著
甲斐理恵子 訳/
原書房

作家紹介

思想を盗め！

～「北緯四十三度のミステリー」伏尾美紀～

一九六七年北海道生まれ、北海道在住。彼女のデビュー作「北緯四十三度のコールドケース」は二〇二一年の第六十七回江戸川乱歩賞の受賞作である。

ところで、北緯四十三度には何があるだろうか？フランス、イタリア……など多くの国を通るが、北海道を通ることは知っているだろうか。彼女は、自分が生まれ育った北海道を舞台にした作品を書くので、私たち北海道民が聞き慣れた場所が多く登場するのもあって楽しく読み進められると思う。また、この作品を読むことによって、作品に登場した場所を次に訪れたときに特別な場所に感じることができるかもしれない。

現在、彼女の著書は受賞作と、その続編の「数学の女王」の二作品のみとなっている。このシリーズは、北海道警察に務める女性の成長が見られるミステリーである。途中、女性警官が少ないというジェンダーギャップについての作者なりの考えがヒロイン越しに伝わって、社会的な問題についても考えさせられる。

私が思う最大の魅力は、三分の二まで事件や証拠が散らばり、最後の三分の一では怒涛の伏線回収がやってくるところだ。証拠や状況を整理しながら前半を読むと、それらが後半で事件の真相とつながっていくので倍楽しむことができる。

前回この「思想を盗め！」を担当した時から「ミステリーの素晴らしさを広めたい」という私の気持ちは変わらない。

皆さんも彼女の二作品を読んでみてほしい。私と同じく、次回作が出るのを心待ちにするようになるだろう。（　　）

月高この１枚！

写真部員たちの
三つ巴の戦いだホー。

場所：玄関前　　撮影：

心に移りゆくよしなしごと

このコーナーでは、局員が自身の体験や見聞を通して思ったこと、考えたことを、「そこはかとなく」書いた「エッセイ」を紹介していきます。

雨の日

私は時々、朝外に出た瞬間に溜息を吐きたくなる日がある。雨の日特有の匂いを鼻先に感じた日だ。髪もかばんも濡れるんだろうなぁとか、頭痛を発症したら嫌だなぁとか、終いにはあれ忘れたかも、そういえばこの課題終わってなかったとか。意図的に封じ込めていたものが、雨の匂いがもたらす不思議な力によって解き放たれてしまったような気がして憂鬱でたまらなくなってしまうのだ。

そういえば、以前とある私の友人にもこの話をしてみたことがあったのだが、面白い答えが返ってきたことを思い出した。彼が言うには、雨の日の朝は、逆に気分が高揚してワクワクするそうだ。あまりにも自分と違いがあり過ぎるものだから、どうしてなのかと尋ねてみたのだが分からないと言う。

それならば何故、ここまで人によって雨の日に対しての感覚が違うのかと、勝手に自分で調べてみた。

まず、雨で憂鬱になる理由についてだが、気圧により自律神経が乱れることによってイライラしやすくなるというものと、日照時間が短くなることによりセロトニンがあまり分泌されなくなるというものが大きいそうだ。

次に雨の日にワクワクするという人についてだが、野次馬意識、いわゆる怖いもの見たさが強く刺激されることによるものが大きいそうだ。これは、過去に雨絡みの災害を見た人間が先天的に身につけるようになったものらしい。

このことから、雨の日にネガティブになる人は比較的繊細な性格の人、楽天的な思考になる人は日々に楽しみを見つけ出せる人なのではないかと私は考察した。

皆さんは雨の日、どんな思考になりますか？（　　）

本屋大賞2024

1 『成瀬は天下を取りにいく』　宮島未奈 著／新潮社

見事2024年度「本屋大賞」を受賞した本作、驚くことに作者は今作がデビュー作である。そんな本作の舞台は滋賀県。小学生のとき作文コンクールで表彰されたり、テレビに出演したりと幼少期から圧倒的な存在感を出していた成瀬。そんな成瀬と友達であることだけが自慢の極々平凡な島崎。成瀬はいつも突発で、それでいて奇想天外なことをする。大型ショッピングセンターの閉店に合わせたテレビの中継に映ろうとしたり、急に島崎とコンビを組んでM－１に出ようとしたり、高校の入学式に髪を坊主にしたり。どんなに周りの人が止めても、どんなに変な目でみられても成瀬は止まらない。自分がやりたいと思ったことは意地でもやり通す、そんな成瀬という人物が織りなす物語が描かれた本作、ぜひ図書館で手にとっていただきたい。

2 『水車小屋のネネ』　津村記久子 著／毎日新聞出版

続いて2024年度２位を受賞した本作。被服科の短大への入学金を母親に使い込まれた18歳の理佐。突然の出来事に彼女は何をすべきかわからず絶望していた。だがそこで妹の律が母親の再婚相手から虐待を受けていたことを知り、彼女は一つの決断をする。職安で求人を探し、理佐は律と共に家出をすることにした。職安で見つけた仕事は泊まり込みのできるそば屋での給仕。とある田舎で夫婦が営業している店で平日の昼には近くの会社員たちがきて忙しくなるがやりがいのある仕事だ。だけれどもう一つ、大切な仕事がある。そば屋のすぐそばにある水車小屋、そこにこのそば屋のもう一人の従業員、ネネがいる。ネネの指示で、石臼にそばの実をいれること、給仕をすることが理佐の仕事だ。とある田舎での理佐と律、そしてネネの物語、ぜひ楽しんでほしい。（　　）

片言隻語

木々が芽吹き、花粉の飛び交う季節となりました。毎年、花粉に悩まされているという人も多いことでしょう。花粉症は、花粉に対する免疫反応で、「マスト細胞」と呼ばれるアレルギー反応に関与している細胞から、アレルギー誘発物質が放出されることで、鼻水等の症状が引き起こされるというメカニズムだそうです。

４月から新学期が始まり、新しい環境にも少しずつ慣れてきた頃だと思います。これから、月高祭などの楽しい行事もあるので、何としてでも定期考査を乗り越えていきたいところです。（　　）